

〈和習〉の位相

丸山隆司

はじめに

なによりも、日本人が漢詩・漢文を書くためには、その文字＝漢字を駆使できなければならない。そのためには漢字ひとつひとつに對して、その字義に照応するところの〈和訓〉が与えなければならぬ。そればかりか、その文字によってどのように表現することができるか、漢字が負う表現の蓄積にとって妥当なことなのかも知らなければならぬ。

ところが、この〈和訓〉とは、その字義に与えられたところの日本語訳の謂だが、それこそこの字の日本人にとっての意味である。そして、字に〈和訓〉が与えられたとき、その〈和訓〉を支える日本語のコンテキストにその字がからめとられてしまうことになる。とすれば、中国語のコンテキストと乖離する必然性をその時点から孕んでいて、〈和訓〉が与えられること自体が〈和習〉となってしまうということなのだ。にもかかわらず、その文字＝漢字があたかも中国語と日本語を覆う普遍性をもっているかのように見えることから、その中国語からの落差として〈和習〉という概念があるのだろうか。だが、日本人が漢字を用いること自体に、いまのべたようなコンテキ

ストの差異が孕まれるとすれば、もはや〈和習〉といういいかたは当らないだろう。しかし、そうでありながらも、漢字を用い漢詩文を綴ることによって中国への同一化を目ざしたところに、じつは『懷風藻』の、その〈和習〉の問題があったのではないかと、のべてきたことを確認してゆくことで論を進めていこう。

1.

たとえば、つぎの詩。(以下、本文引用は『大系本』による。)

景麗金谷室	景は麗し金谷の室
年開積草春	年は開く積草の春
松烟雙吐翠	松烟雙びて翠を吐き
櫻柳分含新	櫻柳分きて新しきことを含む
嶺高闔雲路	嶺は高し闔雲の路
魚驚亂藻濱	魚は驚く亂藻の濱
激泉移舞袖	激泉に舞袖を移せば
流聲韻松均	流聲松均に韻く

この詩の5・6行目は、大系本の頭注に、

(長屋王「初春於寶樓置酒」)

この二句、「嶺は高くして雲路に闇く、魚は驚きて藻浜に乱る」ともよめる。

との説明がくわえられている。とすると、この二句の意味はどのようになるのだろうか。やはり、その頭注には、

嶺は暗い雲のかかった路に高くそびえ、魚は乱れてはえた藻の浜に跳ね上がる。

と、意解がしめされている。この解では、「闇雲の路」を「暗い雲がかかっている山路」の意にとり、「乱藻の浜」の「乱」を藻の状態を表現するものとみなしている。しかし、頭注に示された「訓読」においては、「乱」は魚の動作をあらわすものとみていることになる。とすれば、それは、「魚は驚きて……乱る」と魚の動作が重なっていることになり、それに対応して5行目もまた「嶺は高くして……闇く」と対句として整合的に理解されている。しかし、この「嶺は……雲路に闇く」という文脈からは、「雲路に闇く」が「暗い雲がかかっている山路」という意だけではなく、「雲が空を渡っていく路」という意を孕んではいけないか。とすると、また、

嶺は高く雲路を闇くし 魚は驚く藻濱を乱す

といった「訓読」も可能ではないか。つまり、すくなくとも「闇」と「乱」をめくっては、「訓読」の揺れがあることは確認できる。

もちろん、ここでその「訓読」の正確さを問題にしようとしているのではない。むしろ、このような「訓読」の揺れが詩行への、あるいは詩句への微妙な理解の差異を孕んでいて、逆にそうした差異を許容している《漢詩表現》と、「訓読」との位置関係を測ってみたいのだ。この詩には、まだそうした「訓読」の揺れを指摘することができ。1・2行目の、

景麗金谷室 年開積草春
は、漢語のシンタクスにおいては、

景は金谷の室に麗し 年は積草の春を開く
というふうにとらえるのが正確だろう。『大系本』の「訓読」はそのようにとらえつつ、詩的な表現としての「訓読」を試みているのだろうか、とみなしうる。が、それは、また、

景の麗しき金谷の室 年の開く積草の春

といった「訓読」をも許容しはしないか。この両者の差異は、景・年に重点がおかれるのか、それらが金谷の室・積草の春に固有のこととして表されているのか、という微妙な差異にすぎない。だが、視点をかえていうならば、この詩の作者がどのような意図、というよりはどのような「訓読」と同一化しうるものとしているのか、ということになるか。あるいは、こうした「訓読」の揺れそのものを孕んだものとして《漢詩表現》がとらえられていた、とも考えることができるか。とすれば、そのような姿勢にこそ「和習」にかかわる根抵の問題が孕まれてははいかないか。つまり、この示したような「訓読」の揺れは、もちろん、漢詩を作るときに作者の側に自覚的であったとはいえないだろうが、このような揺れが許容されるような表現として漢詩に向かっていたのではないだろうか。だが、もちろん、厳密にはその《漢詩表現》は漢語としてみるかぎり、その固有のシンタクスによってとらえられる解をもっているはずである。ということはひとつの《漢詩表現》をはさんで、ふたつの言語の領域における理解の乖離が、そこにあるとみることができ。このこと自体が、すでに「和習」の根抵にかかわることである。この「訓読」の揺れを、いますこし詩語の水準でみてみよう。

2.

たとえば、「雲」という詩語をとりあげてみよう。

- a 雲旌 雲旌張嶺前 (五)
- b 雲鶴 天紙風筆畫雲鶴 (六)
- c 雲岸 雲岸寒援嘯 (一三)
- d 雲羅 雲羅囊珠起 (一七)
- e 雲疊 雲疊酌烟霞 (二一)
- f 雲裏 雲裏望雲端 (二七)
- g 雲端 雲裏望雲端 (二七) / 雲端邊國我調絃 (八九)
- h 雲路 鳳駕飛雲路 (八五)
- i 雲衣 雲衣兩観夕 (三三) / 天霽雲衣落 (九四)
- j 雲垂 暁雁苦雲垂 (一一七)

(注・詩番号は『大系本』に従う)

a 「雲旌」は「雲にたなびく旗」(『大系本』、以下とくに注記しない意解は同じ)の意で「雲」は「旌」を比喻するようなたらきをもつ。「旌」は旗の一種であり、「雲旌」という詩語はみいだしえなかつたが、「雲旗」は『文選』に何例かをみる。

龍輅充庭 龍輅庭に充ち

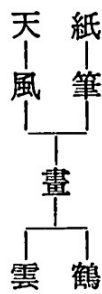
雲旗拂覽 雲旗覽を拂う (張平子「東京賦」)

は、その一例であり、天子の車が朝廷に充ち、その車の旗が雲をつくばかりの勢いで天辺の気(覽)を追い払いのけるほどであるの意。「雲旗」は(雲に至らんばかりに並び立つ旗)というほどの意となろうか。とすると、「雲旌」も「雲旗」も単純に雲のような旌

あるいは旗、という比喻とするのは危うい感じがする。むしろ、「雲張嶺前」(雲が嶺の前に張りだしている、という意)の情景そのものが、遊獵のためにかかげられた旌の立ち並ぶといった様子を比喻しているともみることが出来る。このことは『文選』の例についてもいえよう。「雲拂覽」(雲が天辺の気を払う)という情景が旗のたなびくさまを比喻している。ということは、「雲旌」も「雲旗」もこの二語のみの関係からはとらえることのできない関係性を孕んでいるということではないか。

このような関係性は、bにおいてもっと端的にあらわれる。

「雲鶴」は「雲間にかける鶴」という意とみられるが、この詩句は、(天という紙に風という筆で雲間にかける鶴を画く)というほどの意であり、それは「紙に筆で鶴を画く」という文章と「天に風で雲を画く」という文章とのそれぞれの語の文法的な位置関係が重られ、図式的に示せば、



とでも現わしうるような関係が前提になっている、とみなしうるだろう。(2)とすれば、「雲鶴」も単純にそれだけでは「雲間をかける鶴」という意を含んでいると云いきれないだろう。いいかえれば、重ねあわされた文章によって微妙なニュアンスを孕んでくるのだ。「雲鶴」という詩語は、たとえば、

何慙雲鶴起 何ぞ慙ぢむ雲鶴の起るに

詎滅風驚時 詎ぞ滅ぜむ風の驚く時に

(江洪「詠舞女」『玉台新詠』卷五)

にみえる。舞する女を誉める表現だが、この「雲鶴」は「鶴が雲から舞いあがるさま」（鈴木虎雄訳）、あるいは「雲の上から鶴が舞った姿」（『新訳漢文大系』）とらえられている。だが、この「雲鶴」は、また「雲間をかける鶴」という意にもとらえうるし、〈雲と戯れる鶴〉というふうにもイメージできる。ということは、そのように〈読み〉てしまうことを許容する、この《漢詩表現》とその〈読み〉との位置関係をどのようにおさえることができるのだろうか。もう一度確認すると、「雲鶴」は〈雲のような鶴〉でも〈鶴のような雲〉でもない。それは「雲間にかける鶴」であって、いいのだが、そのように〈読み〉るのは、先に示した図式にみられるようなふたつの文章の相関に支えられているのだ、といえよう。この「雲鶴」という詩語は、『玉台新詠』の用例に照らしてみても、とくに〈和習〉を孕んでいるとはいえない。だが、〈和習〉ではないとして「雲鶴」という《漢詩表現》が許容してしまふ〈読み〉の揺れとは、やはり日本語のコンテキストの側における表現であることを示唆してはいないか。いいかえれば、「雲」の〈訓〉Ⅱくもと「鶴」の〈訓〉Ⅱたづあるいははつるというそれぞれの語に蓄積されている指示表出と自己表出との相関に支えられてこの表現はなりたっているということではないか。さらにいえば、この「雲鶴」は、「雲間をかける鶴」といった〈訓読〉さえも拒んでいるようにもおもわれる。それは「天紙」「風筆」にしても同じなのだろう。すなわち、この〈訓読〉ということを経験した日本語のコンテキストにおける語の相関関係のとらえ方といった位相にまで抽象してみるとすれば、表現する側はそこどのような〈訓読〉文の可能性を想定しえたのだろうか。〈読み〉の揺れは、いわば必然のように思われる。そし

て、ここに〈和習〉への根源的な問いが存在するのではないか。そのことを追い求めるために、残る例を検証してゆこう。

d 「雲羅」は「…雲を羅（うすもの）に見立てたもの、くもに同じ」である。これも、しかし、「羅珠を襲む」と「雲起る」との相関があるようにみえる。「雲羅」は「雲」を「羅」にみたてたものであるとしても、いったいどのような〈訓読〉が可能なのだろうか。⁽³⁾漢詩の用例を一・二例あげてみよう。

厭紅海而游澤 紅海を厭ひて澤に遊び

掩雲羅而見羈 雲羅に掩われて羈（ほださ）れる

（鮑明遠「舞鶴賦」）

曠哉宇宙患 曠なる哉宇宙の患

雲羅更四陳 雲羅更に四陳す

（江文通「雜體詩・替中散」）

前者は、六臣注に「済曰雲羅言羅高及雲」（雲羅、言うところは羅高くして雲に及ぶ）とあり、「雲羅」は羅網（あみ）が雲に及ぶほど高く張りめぐらされている、という意。鶴が捕獲されたことをあらわす。「雲羅」は〈雲のような羅〉ともとらえうるが、やはり比喩としてしまうのは危うい感じがする。後者の例は、やはり六臣注に「翰曰言天地患如雲之羅列陳布於四方」（言うところは天地の患みが雲のつらなりならび四方にのべおおっているようだ）とあり、「雲羅」は雲を羅（うすぎぬ）にみたてたものとみてよいだろう。この「陳」もどちらかといえば「羅」にかかわる動作のように解されていることから、「羅更…陳」（羅が更…も…陳らなる）という文脈に支えられているとみることができよう。前者と後者では微妙に「雲」と「羅」との関係には差異がある。前者はいわば〈雲のような羅〉、後者は

へ羅のような雲とみなしうる。この差異は、おそらく前者の「掩雲羅」の「掩」が雲にかかわる表現であることからきているのではないだろうか。いわば、両者の見立てを成りたたせている文脈の差異に支えられているとはいえないか。dの例は、どちらかといえば後者に近い。そして、この出典（とおぼしきもの）に照らしみても、それは〈和習〉とはいえないだろう。だが、この見立てを了解する、そこに先のような意味での〈訓読〉ということがかかわるとすれば、やはり〈和習〉は潜在するのではないだろうか。

c「雲岸」は「雲そかかる岸」、e「雲疊」は「雲雷の形を彫刻した酒樽」、f「雲裏」はへ羅の中へあるいはへ雲に覆われた空へ、g「雲端」は「雲のはし」、八九の例では転じて「青雲の向伏す極」（祈年祭祝詞）といった僻地の意を孕んでいる。この例は多い。

美人在雲端

美人雲の端に在り

天路隔無期

天路隔りて期無し

（枚乗「蘭若生春陽」詩）

雲端楚山見

雲端に楚山を見

林表吳岫微

林表に吳岫微かなり

（謝玄暉「休沐重還道中」）

いずれも僻地あるいは辺境の意を含んでいる。

h「雲路」は「雲のかかる天上の路」の意。この詩は「七夕」をモチーフにしており、織女星が牽牛星ももとに通う様をあらわす。とすれば、それは織女星が天空を翔ける様としてイメージ化されるかぎりにおいて、「雲路」はさまざまな解を許容しうるだろう。たとえば、へ雲の覆う、湧きあがる路としよう（4）というように〈訓読〉文を生みだしうるだろう（4）。

i「雲衣」（三三）は雲を衣にたとえたもの。この「雲衣」は、万葉集にみられる次の例に通じる。

天の川霧たち上る織女の雲衣能反る袖かも（万十・三三）

この例の「雲衣」は「織女は天人であるため、その衣も雲であろうと想像している」（小学館古典全集頭注）とされている。そこには「微歩シテ雲衣動ク」（初唐杜審言「奉和七夕宴兩儀殿」という例もあげられている。このうたの例は、いわば直接雲を衣にあるいは衣を雲に見立てているといえよう。だが、それにしても「雲の衣」という日本語の語構成は、そのようなたとえを許容するのだろうか。漢詩語の「雲衣」をそのようなたとえとして了解しつつも、「雲の衣」としか日本語に翻訳（訓読）といってもよいが（5）しえないところに介在する偏差があるとみなしうる。i（九四）の例は、しかし、雲を衣に見立てていることとなる。同じ「雲衣」であっても、その関係は限定されている。そうでありながらも、それは、やはりへ雲の衣としか〈訓読〉しえないように思える。この偏差とは、漢詩語「雲衣」に対する観念的な関係把握と言語表現とのずれということができよう。しかも、この観念的な関係把握においてさえ、さきへのべたような位相での〈訓読〉における差異がありえらむとしたら、そもそも漢字をもちいて漢詩を日本人が作ることで自体が根柢において〈和習〉でしかないということなのだ。とすれば、〈和習〉と呼ぶこと自体がどれほどの意義をもつだろうか。

そのことを論じる最後に最後の例g「雲垂」をみておきたい。『大系本』頭注は「垂は陲に同じ：陲は果て、境」とし、「雲の垂（きはみ）」と〈訓読〉する（6）。作者を同じくする一一六番の詩には「天垂」の語がみえる。

相望天莫別
分後莫長違

相望みて天垂に別る

分れて後に長に違ふこと莫れ

(石上乙麻呂「贈掾公之遷任入京」)

この「天垂」は、乙麻呂が掾某とわかれる土佐国を指すとみられる。この「垂」は〈陞〉に通じる。つまり、g「雲端」に通じる意味をもつ。さらにいえば「天垂」は古代中国の〈天円地方〉という宇宙観に支えられた表現であるだろう。そのような宇宙観への理解は、しかしどのようであったのか。「雲垂」はやはりこの「天垂」にならった語であろうか。たとえば、

廻池瀉飛棟

廻池は飛棟を瀉し

濃雲垂畫堂

濃雲は畫堂に垂れ

(簡文帝「餞廬陵内史王修忠令」)

この例は、だが〈雲が垂れこめる〉の意であり、「垂」は「陞」ではない。この他『佩文韻府』に引く例は、いずれも「垂」が動詞として用いられており、「陞」に通じる例はないようである。とすれば、この「雲垂」(「雲の垂」)は「天垂」を応用した〈和習〉とみるべきだろう。そして、この「雲垂」を生み出した背後には「天垂」を支えているとみられる〈天円地方〉という宇宙観に対する理解の危うさがありはしないか。「天垂」の「垂」が〈陞〉(ほとり)であるならば「雲垂」という表現も可能だという、いわば漢字の字義の組み合わせにおいて可能だった、ということではないか。あるいは、

青雲の靄く極み 白雲の墮り坐向伏す限り(「祈年祭」祝詞)

といった表現によって想い描かれるところに支えられているのだろうか。

このように前節に見た詩行への〈訓読〉の揺れ、そしてそのより微細な水準として「雲」をめぐる詩語群におけるそれをみてくるとき、〈和習〉の位相はどのように総括してみることができのだろうか。

3.

すでにのべきたったことからいえば、〈和習〉という概念そのものが、あくまでも漢詩文の表現の蓄積を前提にしてのみ成り立つ概念であることは確実であろう。それは小島憲之の次の指摘に集約される。すなわち、明治の啓蒙学者西村茂樹の「文章論」(明治十七年四月、第六編第四冊『東京学士院雑誌』所収)の一節、

此国ニ在リテ他国ノ文章ヲ学ブガ故ニ到底文章ノ真ノ巧拙ヲ知ルコト能ハズ。日本人ノ見ル所ニテ名文章ト見ユルモノニテモ、支那人之ヲ見ルトキハ如何ナルカ預ジメ之ヲ料ルコト難シ……畢境言語ノ国ノ人ニシテ文字ノ国ノ文ヲ学ビ、其音韻モ異ナリ排置ノ順序モ異ナル所ノ文章ヲ書クコトナレバ、其真ノ巧拙ヲ知ルコト能ハザルハ怪ムニ足ル者ナシを引きつつ、

この論の如く、日本人が如何に本場物に追い付こうとしても、それはやはり不可能であることは一般のならない、この日本人の和風の表現が詩文の随処にみられるのは、当然であろう。「和習」とは日本人に書く詩文に日本的な表現、日本的な臭味をもつ意であろう。(8)

とのべている。そして、さらに大津皇子の五言絶句「臨終」をとりあげ、それが、いかに〈和習〉粉々であっても「初冬夕日の中に命

を刻む鐘鼓の声を聞きつつ世を去ろうとする皇子の死は、やはり哀れが深い」と説き、

このように考えると、漢語的表現も和習があるという理由のみによって、みずから天地を踰る必要はあるまい。詩文の漢語的表現の特色として和習的表現が峻然として存在する以上、かえって堂々と日本文学史の一部に「和習文学史」という看板を掲げてよまろう。詩学に根ざす「和習」問題にかかわらず自由に表現すれば、これこそ「和習」もまた楽しき哉といえよう。

と、いわば〈和習〉の必然性を認め、それを肯定している。そのことを本稿において、のべてきた視点から確認すれば、なによりも漢字を日本語と結びつける、そのような手続きにおいて〈和習〉は根底的であり、必然的である、ということになるか。すなわち、日本人が漢字を用いて漢詩文を綴ること自体が、もはやことごとく〈和習〉でしかありえないということなのだ。そのことにおいて、〈和習〉を肯定するとしても、漢詩文という中国詩の《詩のかたち》を借りての日本語表現が目ざそうとしたものはなにか。もちろん、当の作り手たちに、そのような〈和習〉に対する本質的な自覚があったかどうかは、おのずから別の問題である。としても、そのような《詩のかたち》を借りて表現しようとしたところは明らかにされなければならないし、そのことにこそ、いわば表現としての〈和習〉の本質がありはしないか。たとえば、次の詩。

開衿臨靈沼　衿を開いて靈沼に臨み
遊目歩金苑　目を遊ばせて金苑に歩む

（大津皇子「春苑言宴」）

この詩の作り手大津皇子が、眼前に見るあるいはその想像のうち

に描く「春苑（はるのその）」の情景とこの詩の表現とはどのような切りむすばれているのか。右の詩句は「開襟乎清暑之館遊　目乎五柞之宮」（西征賦）に習い、さらに「靈沼」は周の文王の園池のことをさす。これらの表現は中国詩の表現の蓄積（これを出典とみなすことができれば）に連なる。そのことによって、作り手の眼前に見るあるいは想像のうちに描かれる「春苑」の池は、この表現を媒介として出典への、つまり中国詩の表現の蓄積への同一化を目ざしている、といえよう。だが、そこにずれはないか。あるいは、むしろ表現によってずれを無化しようとしているのだろうか。いいかえれば、文王の園池としての「靈沼」がそこに現出していると表現することによって目ざされているものはなにか。それは、中国と一体化しようとすることではないか。中国と日本との差異を無化しようとすることではなかったか。だが、それが中国詩という《詩のかたち》に則っていることにおいて、その差異は逆に自覚的でなければならなかっただろう。このことは、次のようにも問うことができる。中国と日本との差異を無化しようとするこの表現を支える〈共同性〉はどのようにありえたのか、と。さらにいえば、この中国と日本との差異の無化を目ざす表現は、とどのつまり中国に向いているのか日本へ向いていたのか。結論は、すでにみえていよう。日本人が漢詩文を作ること自体に根拠として〈和習〉が必然であるとするれば、その表現を支える〈共同性〉は日本に向かってしかはたらくべきようがないだろう。だが、にもかかわらずそれがあたかも中国と日本との差異を無化することとしてなりたっているという幻想をもとうとしたところに、いわば古代王権が希求しようとした普遍性の様相があったのではないか。

表現としての〈和習〉という問題を立ててみると、このことは避けられないことであるように思われる。

- 注1 ちなみに、『懐風藻新註』（林古溪）には、「山山は夕もやの上に高くたつてをり、魚どもは池の藻のしげみ走りまはつてをる」とある。「聞雲の路」「乱藻の浜」に対する解の違いをはつきりとしめしている。
- 2 この《漢詩表現》のありかたについては、丸山「万葉集表現論序説―詩語構成論―」（『研究と資料』第一輯S54・4）にのべた。参照されたい。
- 3 『新註』は「雲羅、珠を囊にして起り」と〈訓読〉し、「雲が真珠の珠を囊に入れて立つ。雪が降り始める」と説いている。
- 4 「雲路」の一例をあげおく。

質雖滞于城闕
策已成于雲路

質城闕に滞ると雖ども
策已に雲路に成る

（王勃「馴鷹賦」）

- この「雲路」は、〈雲の通う路〉といった意であろう。
- 5 このような助詞の「の」はたつきについて、注2の論を参照されたい。
- 6 『新註』には、その〈訓読〉を「曉雁、雲の垂るるに苦しむ」とし、その解に「曉方になると雁が鳴いて来るが雲が垂れてをるから、いかにも苦しみ迷つてをる」と説く。『新釈』（釈清潭）も『新註』に同じ。
- 7 たとえば、大室幹雄『田碁の民話学』（S52）に説かれるところを参照されたい。
- 8 「日本文学における漢語的表現I―和習的なるもの―」（『文学』S59・12）。以下の引用も同じ。

「古代文学」総録目

24号（昭和六十年三月二日発行）

特集〈神楽歌・催馬楽〉

神楽歌と神楽・催馬楽	古橋 信孝	神楽歌と催馬楽―嬖子詞の詞―	吉田 修作
神楽歌・催馬楽と和歌	高野 正美	神代世界の生成を読む―葦原中国と三層構造の問題―	西条 勉
神楽歌の表現	高橋 六二	猿田毗古祭祀とその神話―伊勢のアサカの伝承から―	阿部 寛子
催馬楽の表現―『源氏物語』へ―	藤井 貞和	「さやけし」の周辺―清るる自然― 試論2―	野田 浩子